

# 巻頭言

## 未来は若者が拓く

労協センター事業団常勤顧問・東京家政大学名誉教授 片岡 輝

### 既成社会への組み込みでなく、新しい価値体系の創造へ

自明なことは、未来を担うのは若者であるという事実である。大人の日々の営みの全ては、過去を未来へ手渡すためであり、現在はそのために用意された貴重な時間である。言うまでもなく、過去は間違いだらけのエルドラド(幻の黄金郷)であり、現在は間違いをいかに修正、改良して未来へ引き継ぐかについて、保守革新、男女、世代が入り乱れて相争う修羅場であって、新旧の価値観が激しくぶつかるマグマの中で世代の交代が進み、やがて変革の萌芽が大きく育って未来を形成するに至る。いま、私たちが直面している困難の多くは、交代を巡っての利害の対立と価値観のずれに起因している。

本号の特集テーマである若者の自立・就労支援を例にとれば、世の支援策の大半は、若者の既成社会への組み込みと既成価値観への馴致であるという限界を持ち、真の自立と主体的な労働に結びつく就労とは大きくかけ離れている。支援がこのレベルにと

どまる限り、格差や矛盾の再生産は終わらない。めざすべきは、既成社会からの自立への支援であり、新しい価値体系に立脚した労働の創造への支援であるべきではないのか。

### ヒア・バイ・ライトーイギリスの取り組みから学ぶ

では、世代間の利害の対立と価値観のずれをどのようにして超克するのか。その一つのヒントが、イギリスの労働党ブレア政権が2004年に策定した「Every Child Matters - Change for Children」(「どの子どももみんな大切 - 子どもたちのための行動計画」以下、ECMと略)に基く、若者の自立支援と社会参画を進める取組みの根幹をなす「ヒア・バイ・ライト(hear by right)」(「子どもの意見を聴く」)の理念と手法にある。The National Youth Agency, UK編・奥田暁子監修・吉岡美夏+小島紫訳・萌文社刊の「ヒア・バイ・ライトの理念と手法」からそのエッセンスを紹介しよう。

まず、ECMとは、全ての子どもが、①

健康であること、②安全に暮らせること、③生きる力を身に付け、楽しむこと、④社会の一員として生きていけること、⑤経済的に困らない生活ができること、を実現する行動計画で、「若者プラン10カ年計画」「子どもプラン10カ年計画」に沿って、子どもの参画を含む子どもの視点を取り入れた政策が進められている。

この政策の根拠法である児童法2004には、子どもと大人社会のパイプ役として、子どもの声を聴き、子どもの考えや興味を政府に伝え、政策に反映させたり、政府の考えを子どもに伝える役割を持つ、子ども長官の任命、地域の子どもの幸せの実現するための地方自治体と民間組織の協働体であるチルドレンズ・トラストの設置、安全と福祉を促進する地域子ども安全委員会の設置などの9項目が規定されている。

これらの政策の展開の中で、子ども・若者の社会参画の手法が模索され、ナショナル・ユース・エイジェンシー (NYA) が具体的な実践例をもとにして開発した「ヒア・バイ・ライト」の理念と手法が、若者・子どもを参画させるときに活用可能なツールとして評価されるに至った。

「ヒア・バイ・ライト・スタンダード」は、子ども・若者の「参画」が社会を変えると、いう理念のもと、子ども・若者の声を聴き、参画を促す次の7つの基本的なユニットから構成されている。

①これまでないがしろにされてきた、子ども・若者の声を聴き、それに応えるために必要な財源や人材の投入を決定する合意

形成に不可欠な「共通の価値観」。

②子ども・若者の参画の具体化についての、おおまかなストーリーの作成、すなわち「戦略」。

③少数の特定グループに偏らないよう、さまざまな子ども・若者が参加可能な「仕組み」。

④持続的な参画を可能にする金銭的なサポートを含む「体制」。

⑤子ども・若者との協働に関わる熱心で信用の置ける「スタッフ」。

⑥子ども・若者の技術・知識・自信・能力を向上させる研修やサポート「技術と知識」。

⑦組織のそれまでの文化に変化を起こす勇気と活力のあるメンバーをリーダーに育てる「リーダーシップのとり方」。

本書の編著・監修にあたった奥田暁子は、日本語版の刊行にあたって、「日本では、『聴く』という言葉に出会うと『傾聴する』(カウンセリングマインド)の意味にとられるかと思いますが、「ヒア・バイ・ライト」でいっている『聴く』は、単に傾聴することではなく、子どもの意見に耳を傾け、純真・公正で広大な夢を見ることのできる子どもの意見を社会に取り入れ、大人と子ども・若者で社会の仕組みをより良いものに変えていこうというものです。「ヒア・バイ・ライト」は、子ども・若者の社会参画でこの社会を変えていこうという考え方であり、それを具体的にする手法です」と述べている。

国情のちがいを超えて、このイギリスの取り組みから学ぶことは多々ある。若者の

自立・就労支援も若者たちの声を誠実に「聴く」ことから始めなくてはなるまい。

### 対等の人間としての切磋琢磨は、若者と大人の双方を変革する

教育は、位階性に基づく上から下への知の伝達方式から、学ぶ者・教える者が対等の位置に立って切磋琢磨する双方向方式へとスイッチしつつあるが、一人の人間として向き合う学びの営為は、新鮮な感性と熟成した知性との、おそれを知らない勇気と経験に裏打ちされた慎重さとの、虫瞰的な

ものの見方と鳥瞰的なものの見方との、場あたりと計画性との、ぶつかり合いと融合を通して、若者と大人の双方の自立と連帯を促し、学問の変革をもたらす。

同じように、労働＝生きる営為に変革をもたらすのが、自立した個人が社会変革をめざして他の自立した個人と連帯する協同労働という生き方にほかならない。破局の崖っぷちに立つ、地球と人類の未来を救う社会変革のパワーと可能性を協同労働は内蔵しているといえる。